

社会学教育におけるビデオ活用

『ビデオで社会学しませんか』に込めて



小高 良友
東海女子大学・文学部

はじめに

私が現在の勤務校に赴任してきた平成元年、担当授業のひとつに一般教養の「社会学」があった。新米教師の私は、広い教室で元気な女子新入生百人を前にとても困惑したものだ。女子学生はひじょうに正直である。へたでもこちらが精魂こめて準備した授業には彼女たちはそれなりに応じてくれる。ただし、その授業が必ず静かになるとは限らない。しかし、たとえうるさくなっても、こちらがともかく一生懸命やっているということだけは彼女たちに敏感に伝わっているわけだ。本稿は、この悪戦苦闘のなかで生まれ

た一つの試論である。

社会学に限らず大学教育に関しては、小・中・高校教育に比べて「教育技術論」文献が極端に少ない。もともと、「大学冬の時代」到来との関連で私語論その他の大学教育技術論が少しずつ見られるようにはなった。しかし、社会学に限定すると、教育技術論は皆無に近い。この状況の中でとても興味深い書籍が出版された。それは『ビデオで社会学しませんか』（山中速人「執筆代表」、有斐閣、一九九三）である。これを手したとき、私はひじょうな感動に包まれ、強い味方を得たような気がした。

この本は社会学教育におけるビデオ活用の意義を明言

し、様々なビデオ作品にふれながら一般教養社会学のテキスタイルづくりを目指す意欲作である。ただこの本の重点は、ビデオを社会学教育に活用するときの「技術論」の提示というよりは、実際にどのように活用できるかの「試作品」の提示にある。私は「技術論」に比重を置いて、社会学教育へのビデオ活用について考えてみたい。題材は私自身の八年ほどのビデオ活用教育経験である。

以下では、社会学教育でビデオを使用するさいの作品選択の様々な原則について考えた後、社会学教育でのビデオ活用の有効性の理由について述べてみたい。本稿は、女子大生への社会学教育を念頭においているが、男女を問わず他の学問領域の教育にもかなり適用できるはずである。



した教員から学生へのメッセージ（一九九五年）、「大学冬の時代の社会学専攻『生き残り』戦術」（『東海女子大学紀要』第一六号、一九九六年）。

こだか・よしとも●一九五四年、東京都生まれ●専攻は社会学●主な著書、論文に「保護観察官はどのようにみられているか―対象者、その保護者、保護司から」（『少年補導』第三五九号、一九八六年）、「初期H・Sベッカー論」（『社会学評論』第四〇巻第三号、一九八九年）、「社会福祉現場実習のさいの一視点―学生として実習を体験の」（『東海女子大学紀要』第一五号、一九九五年）、「社会学専攻『生き残り』戦術」（『東海女子大学紀要』第一六号、一九九六年）。

ビデオ作品選択論

授業でビデオを活用する場合、ひじょうに重要なのが作品選択である。社会学の授業でビデオを活用し始めた頃は、準備不足の穴埋めにビデオを使用したこともあった。その頃の私は、講義に関連があればどの作品も使えそうだと考えていた。しかし、事はそう単純ではない。ビデオ作品選択の際の原則を以下で紹介していこう。

作品として

面白いこと

が大原則！

ビデオを授業で使用し始めた頃、社会的に使える点を優先させ、作品自体としてはさほど面白くないものを何回か使用した。しかし、そういう時の大半の学生の評判は芳しくない。学生は社会的か否かよりも作品自体にまず注目する。彼女たちの世代は私の世代よりも音や映像にはるかに敏感だ。また学生は、社会的なインプリケーションが知りたいから作品を見るのではなく、ともかく見たいから見るのだ。したがって、使用するビデオ作品はまず作品自体として面白くなくてはだめなのだ。

この場合の「面白い」とは、「笑える」という意味とは限らず、「良質」ということだ。これはひじょうに大切である。社会的には面白くても作品自体として良質のもの

でない場合、まず何人かの学生は途中で居眠りを始め、起きていた学生も何人かは「つまらなかつた」とその後のレポートで必ず書いてくる。良質の作品でもなく学生の評判も良くない場合、講義は学生の頭にほとんど残らない。

教員同士の懇談の中で「ドキュメンタリーはそういうのがないからな」という話があった。私にはドキュメンタリーは使いにくい。ドキュメンタリーは「堅い」作品が多く、学生には一般にドキュメンタリーよりもドラマのほうが評判が良い。ドキュメンタリーの場合、そのテーマに関心がない学生は寝てしまいがちだ。また、後述のように講義テーマにすべて適合する作品を選ぶ必要は必ずしもない。作品全体が講義テーマと必ずしも対応しなくても十分使用できる場合はあるのだ。例えば児童虐待の講義をする場合に、児童虐待のドキュメンタリーを必ずしも使う必要はない。児童虐待の実態はほとんど知られていないため、ドキュメンタリーがその点でとても効果があるのはもちろんだが。

**自分が面白いと
思わない作品は
使うな!**

学生の母親の年齢は私とほぼ同じである。私の作品の好みと学生たちのそれとにズレが生じるのは避けられない。しかし経験上、私が面白いと思わない作品は、まず大半の学生たちも面白いとは思わない。また、

私が面白いと思った作品はかなりの学生も面白いと思うようだ。ビデオを使用する場合、私は必ず課題を設定して学生にレポートを書かせ、その作品に対する学生の反応についても確認しているのだ。ただし、これについてはもちろん注意が必要だ。私が面白いと思わなくてもかなりの学生が面白いと思う作品があるからだ。例えばトレンディドラマのひとつ『星の金貨』はその典型だ。

**作品選びには
時間がかかる!**

授業でのビデオ活用は手抜きではないか、と言われたことがある。ビデオを

使いためたさが私にもあり、その発言に少なからず動揺させられたものだ。当時の私は作品選びをかなり安易に考えていたため、当然それにかかる時間も知れたものであり、授業での活用方法にも工夫がなかった。しかし、今の私は、良質の作品を選び出す大変さや良質の作品の授業活用効果に着目している。

当初の私は、見てきた映画の中から良かったもので授業に使えるようなものを活用していた。この方式では自分が自発的に見ないジャンルの作品は知らないままだ。これでは作品のストック量が先細りになる。それでも新聞・雑誌などでの風評を頼りに以前よりも積極的にビデオ作品を見る

ようにしてきた。しかし、これでもやがて限界がやってくる。受講生や社会の変動に伴い作品の旬も変化するため、同一テーマでの同一作品の使用を避けるほうが効果的だからだ。

そこで私は「お薦め」良質作品を学生に書いてもらうことにした。その中には複数の学生が推薦してくる作品が出てくる。推薦学生が多い作品から順番にビデオを借りてそれらを見始めた。すると、自分が好まないジャンルの良質作品に気づくようになる。たとえば『ダイハード』シリーズがそれだ。『ダイハード1』を見て私は驚いた。これがひじょうに面白いのだ。この学生推薦作品参照方式には世代差を埋める効用もあるはずだ。

トレンディドラマを見るようにしたこともジャンル拡大に役立った。私がまず「はまった」のは『一〇一回目のプロポーズ』である。レンタルビデオ化されたそれを見て私はめまいがするような衝撃を受けた。容易ではないが工夫次第で授業一コマでの連続ドラマの使用も可能だ。たとえば放映済みのダイジェスト版の活用がそれだ。

トレンディドラマの場合、通常年に四サイクルで新作が登場する。各局の新作ドラマの初回を必ずマークし、初回がつまらなかったものは以降は見ない。この作業を行って

いくと、各サイクルで最後まで見る作品は平均して一〜二本位になる。つまらない作品でも以前は三話までは見ていた。しかしほぼ例外なく、第一話がつまらない作品は第三話まではもちろんほぼ最後までつまらない作品であった。

こうなると作品を見る時間が問題だ。私の場合、トレンディドラマはタイマー録画して研究室での休憩時間に細切れで見えてゆく。映画作品や単発テレビドラマ作品も同様である。研究室でビデオを見ながら食事をするわけだ。時にはずると作品をみてしまうこともある。そこまでさせる作品はとて良質であり授業で大いに活用できる筆頭作品になる。授業活用以前にその作品を楽しむことが大切だ。そうでなければよい作品は選べない。

良質作品であること 以外の条件

良質作品であれば授業活用ビデオ作品としてまずは合格である。次は、講義のテーマに合わせて活用

作品をしぼりこむ段階だ。その際の条件は何であろうか。
実態が知られていないテーマの場合、その実態を描く映画やドキュメンタリーの使用はもちろん有効だ。例えば父子家庭についての授業であれば、父子家庭を扱った『クレイマー・クレイマー』や、父子家庭を取材したドキュメンタリー作品が活用されるわけだ。私がいくつもの例を文書や

口頭で説明するよりも、これらを学生に見てもらったほうが実状把握という意味ではむしろ効果があるわけだ。『ビデオで社会学しませんか』でのビデオの使い方もほぼこれにつきよう。

しかし、ビデオの活用方法はこれだけに限らない。私の場合、このような使い方はあまり多くない。これだと授業テーマに対応した作品はかなり限定される。またそういう作品は、テーマに関心がない学生をしばしば退屈させてしまう。

他の活用法は、自分の講義の要点の理解や印象づけの助けになるという条件を備えた作品の活用だ。これだと父子家庭のテーマの場合に父子家庭の作品を扱う必要が必ずしもなくなる。たとえ作品のテーマが異なっても自分の講義の要点の理解や印象づけの助けになればビデオ使用が可能だ。もちろん口頭説明だけで講義の要点が学生に理解されたり印象づけられるような場合にはビデオを使う意味はない。しかし、社会学では口で説明するとわかりづらいものや印象に残りにくい講義要点が少なくない。そのような場合、たとえビデオ作品のすべてが講義内容と対応しているに限らなくても、講義要点の理解や印象づけの手助けのためにビデオを活用する意義は十分ある。

ビデオを使用する私の授業では、ほぼ毎回授業についての簡単なレポートの提出を課している。それを八年間続けてつくづく感じることは、こちらが伝えたいことを学生に伝えることのむずかしさだ。しかし、ビデオを介在させると講義の要点の伝わり方がはるかに異なる。ビデオを使用する時間に見合う効果が十分あるのだ。ビデオの主たるテーマと講義のテーマが異なる場合、映画作品にうるさい学生がそのズレを指摘してくる。そのときに私が言うことなのだが、ビデオ使用の主眼はビデオ作品の入念な分析ではなく講義の要点の印象的な伝達だ。

以上のような使い方をする場合、当面使い道がわからない良質作品はどうすればよいか。用途が思いつかないと何か損をした気になったり、用途を捜そうと神経をはりめぐらせて作品を見たこともあった。しかし、今大事だと思っているのは、社会学的なインプリケーション以前に作品そのものを私がいま楽しむということだ。使用法が思いつかない良質作品は、あせらずに自分の大事なビデオライブラリーに登録しておくのだ。するといつか必ずその作品を活用する日がやってくるのだ。その日の講義の要点を学生に伝えるのがむずかしい場合、ストック作品を次々に回想して思わぬ使い道に気づくことはまれではない。もちろん、

このような控えに作品を回さずとも、それを見ながらその使い道を連想できれば言うことはない。

学生が

見ていない作品を

選べ！

学生に良質の作品を聞いてみるという作品選択方法を紹介したが、以前に見た学生が少ない作品ほど授業では使いやすい。

理由の第一。作品を以前に見た学生の何人かは必ず「解説屋」に変身してしまう。女子学生の場合ほとんどが仲間と連れだって講義室に座席を確保する。そのさい「解説屋」の学生は隣の学生に「次はこうなる」と事細かに話し出す。解説された学生には迷惑であると私が注意しても、解説屋さんの口はまず封じられない。

理由の第二。ほとんどの学生の場合、かつて見た作品はやはり印象が薄くなってしまうようだ。一度見たものだと退屈して苦情をいう学生もいるくらいだ。

見た学生が多い作品を使わざるを得ない場合には、ビデオにかじりついていないと回答できないような課題を用意するとう心がけが大切だ。

女子学生は

オカルトものが

苦手！

私の勤務する大学が女子大であるためか、良質でもオカルトものは学生に不評だ。例えば『エイリアン』シリーズがそれである。もちろん例外の学生もいるが、オカルト作品の授業活用の効果は割り引かれがちなだ。

授業でのビデオ活用効果論

授業でのビデオ活用の主な効用は、前述のように、講義の要点の理解と印象づけにビデオが役立つという点だ。『ビデオで社会学しませんか』でも同様の指摘がなされている。ではこの効用が生まれるのはなぜであろうか。『ビデオで社会学しませんか』ではその考察は省略されているが、私は以下でこの点を掘り下げてみたい。以下の考察は、私なりの利用形態をとったときのひとつの回答である。以下の各点は、ビデオ選択に私が時間をかける理由でもある。

学生が

講義テーマにまず

関心を持つようになる

他の学問と比較して社会学が不利なひとつの点は、学生に馴染みにくい学問であるという点だ。よく耳にするのが「社会学

は何をやる学問だかわからない」という声だ。学生は社会

学よりも心理学や教育学のほうが学問内容をイメージしやすい。社会学の場合、高校での地理学や歴史学・倫理社会といったイメージを新入生は持っている。実際の社会学はそれらとはかなり異なる。そのような新入生に社会学教育を始めようとする場合、「むずかしい」「身近ではない」というイメージが生まれかねない。

そこでビデオの出番がやってくる。上記の社会学イメージを持つている学生にビデオを使用すると、学生は講義テーマにとりあえずの関心を持ってくれる。ただし学生は「ビデオ作品に関心を持つ」のであって「講義テーマに関心を持つ」わけではない。しかし、ビデオ活用は講義のテーマにとりあえず学生の目を向けさせる。これは大切なことだ。

学生が

テーマに入り込む

共通基盤ができる

講義テーマに対する各学生の関心度は様々だ。講義の導入部分でビデオを使用すると、学生は講義に関連する話題をまずは共通に持ち合わせるようになる。これは教師にとってひじょうに強力な武器になる。

ビデオを講義に導入し始めた当初、ビデオ効果に気づいた私はテレビ番組や映画を講義の話題として積極的に取り上げた。しかしこの時の難点は、それらの作品を見ていな

い学生がひじょうな疎外感を味わうということだ。受講生全員がひとつの作品を視覚的に共有するということは、この難点を克服できるのだ。ビデオ上映後の講義のなかで可能な限り私はこの作品に触れる。この作品はともかく全員が共有している当面身近な話題となる。

講義内容が

身近に感じられる

学生に馴染みが薄い社会学の場合、身近な話題に努めて触れながら講義を展開することはひじょうに大切だ。良質のビデオ作品は、とりあえず身近な共通の話題となる。これに努めて触れることによつて、学生は講義内容が身近かもしれないと思うようになる。講義内容が自分とは無縁だと学生に感じさせないことは大切だ。日常生活とやや離れていることでも自分との何らかの関連を学生が見いだすか否かで講義への学生の集中度が全く異なってくる。良質の作品ほどこの効果は大きい。

学生が講義に

参加する

ひとつの

きっかけになる

自分が「お客様」に留まらず講義に参加していると学生に感じさせることの大切さは、既存の高等教育論においてよく指摘されることだ。私もこの点にひじょうに同感である。そのひとつのきっかけになるのがビデオ活用なのだ。ただし、ビデオ作

品を見せることがすぐには参加につながらない。ビデオ作品について学生にレポートを課して、その回答を可能な限り授業で紹介することが大切だ。自分の意見が授業で紹介されると、学生も授業に参加しているような気分になる。すると、自分の意見が紹介されない学生の「お客様」意識にも変化が現われる。学生数にもよるが、全員の意見を紹介する時間はとれないため、事前に私が選択した意見を紹介することになるのだが、授業で意見が紹介されるということは学生には名誉なことらしい。授業へのその学生の参加度はそれだけでも高まる。

これに関連してひじょうに大切なのが「学生は他の学生の意見をひどく知っていたがっている」という点だ。これは大の意見に過小評価されがちな点である。意見交換のチャンスがあるゼミとは異質だと思われる通常の講義でそのチャンスがあると、学生の姿勢がひじょうに変化するのだ。

講義への

学生の反応を

予想する

ビデオへの学生の反応がわかると、その後の講義にたいする学生の反応を予想することが可能になる。これもとても役立つ。

つ。私と学生との深まる世代差により、講義への学生の反応についての私の予想も現実と食い違いがちだ。したがって、学生の反応について事前にデータが

あることは助かるのだ。このデータを利用すると、講義展開を効果的に演出することが可能になる。例えば、ビデオ作品への学生の反応から、講義要点を学生が十分予想しているかと判断できる場合には、学生にとってその内容が新鮮に思えるような話の構成に事前に組み直すことができる。

学生の考えを

誘導する

アンケート調査の誘導質問のようなビデオ使用方法がある。誘導質問とは一定の回答に回答者を誘導する質問のことだ。

学生たちは講義の前に見たビデオ作品にかなり影響される。例えば医療の不正な現場を扱った作品を見た直後の学生たちは、医師や看護婦に批判的な眼差しを向けがちだ。講義の要点をきわだたせるために私はあえてこの傾向を利用することがある。

例えばデュルケムの自殺論の講義を考えてみよう。このときに私がいつも配慮するのは、自殺にたいするデュルケムの視点の鋭さをいかに学生に伝えるかということだ。周知のようにデュルケムは自殺の種々の個人的原因に着目したわけではなく、それら千差万別の自殺原因のさらに奥に潜む社会的影響に着目したわけだ。これをいきなり話し始めるとデュルケムの発想の新鮮さが学生に伝わりにくい。このような発想の転換はさほど難しいことではないと学生

は感じがちだ。そこで、個人的な自殺原因を強調するビデオを事前に使用した後でデュルケムの発想を紹介すると、彼の発想が学生にはいつそう新鮮に見えてくる。当然その発想が学生の印象に残るわけだ。このような使い方は多くはないが、その効果は見逃せない。

終わりに

ビデオを上映する場合、画面はビデオプロジェクタを使用した大画面がよい。音声はもちろんステレオである。ビデオプロジェクタが好都合なのは大画面で迫力があるためだが、室内を暗くしないと上映できないため学生の内職を妨げる効用もある。しかし、これには安眠にもつながらりかねないという落とし穴がある。もともと、作品選びに労力をかければ、寝てしまう学生は皆無なはずだ。

